

日・米・英・仏・独／教科書で学ぶ「国土とインフラ」

[第1回] フランスの地理・歴史教科書から学ぶ①

“考え、表現すること”を教えるフランスの教育

国土学アナリスト 森田 康夫

フランスでは「哲学」が必修科目

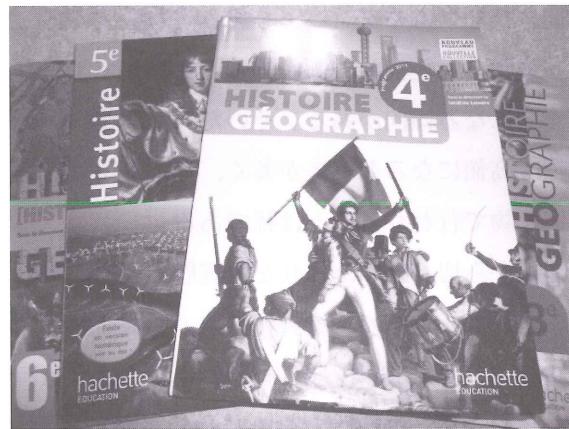
「認識を欠いた場合、解釈できるか?」、「我々は幸せになるために生きているのか?」、「政治に関心を持たずに道徳的にふるまうことはできるか?」、これらはいずれもフランスのリセ(高校)修了認証国家試験「バカロレア」の「哲学」の問題です。

フランスでは、リセの最終学年で哲学の授業が必修科目になり、人文系の生徒は週8時間、経済・社会系は週4時間、科学系は週3時間、職業系でも週2時間の受講が義務付けられています。哲学の授業は、初等教育以降の国語(フランス語)の授業を引き継いで、論理的に思考することを徹底的に教える場、フランス初等・中等教育の総仕上げとして位置づけられています。その成果がバカロレアで問われるのです。哲学の試験(論述式、4時間)では、知識だけでなく明晰な判断力と論理展開の能力、そしてそれを的確に表現できることが求められます。

中・高7年間必修の「歴史・地理」同時教育

フランスの学校教育では、「歴史」と「地理」はともにフランス国民としての人間形成に必要不可欠な教科目で、相互に補完しあう関係にあると認識されています。このため、日本の中学校・高校に相当するコレージュとリセでは「歴史・地理」は一体不可分の必修科目となっており、大学やグランゼコール(高度専門職養成機関)への進学を目指す生徒は、中等教育の7年間、毎年、歴史と地理を学習します。

また、コレージュの教科書は歴史(冊子前半)と地理(冊子後半)が一冊にまとめられています。

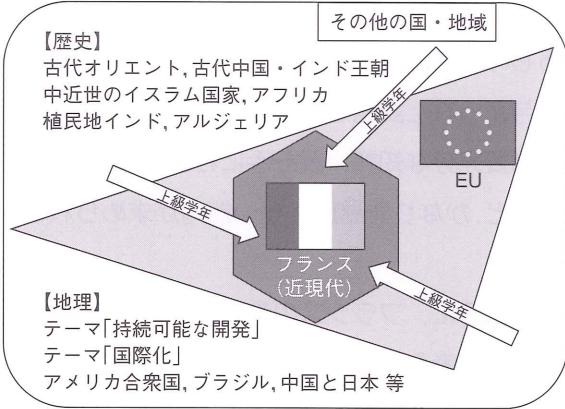


フランスの歴史・地理教科書 [Hachette社]

母国フランスを中心とする「歴史・地理」教育

コレージュとリセの「歴史・地理」教育は、母国フランスとヨーロッパ(EU)を学習の中心に据えています。歴史分野では、古代オリエント・中国・インド王朝、中近世のイスラム国家・アフリカ、植民地時代のインド・アルジェリアを除けば、フランスやヨーロッパ以外の国・地域の歴史はほとんど取り上げられることはありません。地理分野でも、フランスやヨーロッパ以外の国・地域は、「持続可能な開発」や「国際化」をテーマとする学習単元において、ケーススタディとして限定的に取り上げられる程度です。

また、上級学年になるにつれて学習対象とする空間のサイズを小さくしていくという学習プログラムによって、フランスの「歴史・地理」教育は、コレージュの第3級(最終学年)およびリセの第1級(※科学系バカロレア受験生にとって、最終級の歴史・地理は選択科目であるため、第1級が実質上の最終学年である)において、母国フランスの戦後現代史とフランス地誌に総体化されます。



フランスを中心とする「歴史・地理」教育

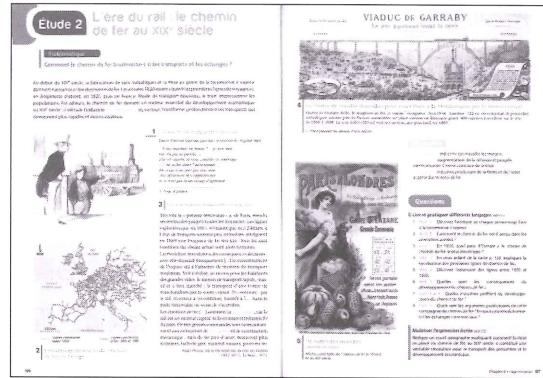
近現代史を重視した歴史教育

フランスでは、コレージュの4年間をかけてゆっくりと古代から現代にいたる通史を学びますが、このうちフランス革命を含む18世紀以降のフランスおよびヨーロッパを主要舞台とする近現代史は、生徒の発達段階が進んだ第4級と第3級の2カ年をかけて学習します。さらにリセでは、第2級で古代から19世紀前半までを学習し、第1級と最終級では、それ以後の近現代史を扱うプログラムとなっています。つまり、フランスの中等歴史教育は近現代史を極めて重要視しており、日本でよく聞くような「授業時間が足りず、明治以降の近現代史はほとんど学習しなかった」ということは起こりえません。

なお、フランスの歴史教科書では、インフラストラクチャーに関する記述が登場する場面は極めて限定的で、18・19世紀の海上交易と港湾都市(ロンドン、ナントなど)に関する記述を除けば、産業革命期19世紀の鉄道整備を取り上げている見開きページが存在する程度です。

「景観」で始まる地理学習

フランスの地理教育では「景観(paysages)」が非常に重要視されます。コレージュ1年目(第6級)の学習指導要領によると、地理教育の第1テーマは「身近な空間：景観と領域」であり、空間を把握する特別なツールとして「景観」が位置づけられています。また、その後の学習プログラムでは、学習対象を世界に広げ、「都市に住む」「地方に住む」



レールの時代：19世紀の鉄道 [Hachette社]



フランスの田園景観 [Hachette社]

「海岸線に住む」「制約の強い地域(高温砂漠、寒冷地、高地、島)に住む」といったテーマごとに、人間社会(人の国土への働きかけの歴史)の多様性を取り扱いますが、「景観」はそれぞれの地域の特徴を読み解く重要なツールとして機能しています。フランスの地理教育は、写真や図などに描かれた空間や景観をどのように解釈するかが学習の起点となっているのです。

ケーススタディを基軸とする帰納的学習方法

フランスの地理教科書の一つの学習単元は、「問題提起→ケーススタディ(複数)→基礎知識の学習→基本となる地図→練習問題→まとめ」といった流れで構成されています。これは、ケーススタディから一般的・普遍的な考え方を見出そうとする帰納的な学習方法で、どちらかと言えば体系的・網羅的な知識の習得に軸足をおく日本の地理学習の方法とは大きく異なるフランス地理教育の特徴です。また、それぞれのケーススタディでは、数多くのテキスト・写真・地図・統計が提示されていますが、これら一

つひとつの資料に設問があり、それに答えることで資料を読み解く力を養っていくとともに、学習課題について理解を深めていくことができるようになっています。

ケーススタディを基軸とする帰納的学習を実践するためには、生徒だけでなく、教える側にも高いパフォーマンスが求められますが、中等教育課程の生徒の学習・認知の発達段階を考えれば、事例を解釈して地理学的推論ができるようになるという意味において、優れた学習方法であるといえます。

「クロッキー」で学習課題の全体像を総体化

さらに、フランスの地理教育では、世界の国々の個別的知識でなく「地理空間の構造的把握」が重視されます。バカラレアの地理では、「ブラジルの国土のダイナミズム」、「空間の再構成：ロシア」「衝動の中心、世界の開発の不平等」など、ある学習課題を略図(白地図)にまとめなさいという形式の問題が出題されていますが、これは「クロッキー(croquis)」と呼ばれる地理の学習スキルで、学習

課題の全体像を視覚的に分かりやすい図に総体化させるものです。優れたクロッキーを作成するためには、与えられた課題を正確に読み解く力、課題の説明に必要充分な知識、読み手にわかりやすく描く表現力など、かなり難易度の高い能力が求められます。

このように、フランスの教育において重要なことは、自分で考えること、考えを論理的に相手に伝えられること、そのとき動員できる知識を身につけることなのです。

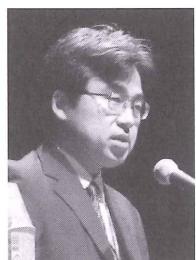
フランスには、「l'exception française（フランス的例外）」という言葉があります。多くのフランス人は祖国を強く愛し、フランスが他国に対して「文化的な優越性」を持つと信じていますが、この「フランス的例外」は、哲学や地理をはじめとするフランスの学校教育からも大きな影響を受けています。

[次回「国土の構造分析と交通インフラを重要視する
フランス地理」につづく]

連載にあたって

わが国では、高齢化により社会保障支出が増加する一方、社会保障以外の支出はOECD(経済協力開発機構)諸国の中で、最低の水準にまで減少しています。その中には、公共事業費(インフラ形成費)や教育費など、現世代だけでなく将来世代にとっても極めて重要な支出が含まれています。

現在、われわれが享受している安全で快適な生活は、先人たちが森林や田畠、鉄道や道路を整備し、川を治め、水資源を開発するなど、絶え間なく国土に働きかけを行うことによって、国土から恵みを返してもらってきた歴史の賜物です。したがって、現代に生きるわれわれの世代も、国土に対して働きかけを続け、将来世代に対して、



もりた やすお

1966年生まれ。

1998年、京都大学工学部土木工学科卒業後、建設省(現国土交通省)採用。東北地方整備局郡山国道事務所長、道路局国道・防災課企画専門官、(財)国土技術研究センター首席研究員などを経て、2010年10月から現職(国土技術総合政策研究所勤務)。

より良い社会基盤(インフラストラクチャー)を引き継いでいかなければなりません。

前回(連載企画／国土教育シリーズ；2011年4月号～7月号／全4回)は、このような「国土学」の考え方が国内の学校教育においてどのように取り上げられてきたのかを検証するため、日本的小・中・高等学校における社会科(地理歴史科)の学習指導要領の変遷に着目し、戦後から現在(前要領)に至る間の学習指導要領を比較するとともに、検定を通過した代表的教科書を精査することによって、教科書の記述内容の変遷・特徴を整理、より良い国土教育の実践につながる幾つかの提案をさせていただきました。

今回(シリーズ Part2)は、欧米主要国(フランス、イギリス、ドイツ、アメリカ)の初等・中等学校の歴史教科書・地理教科書を取り上げ、「国土・インフラ教育」面からみたその特徴を整理するとともに、2012年4月から全面実施されているわが国の新しい中学社会科(地理的分野・歴史的分野・公民的分野)教科書の特徴を整理するなど、日英米仏独の地理・歴史教科書を比較・検討することにより、国土とインフラについて改めて考える機会を提供したいと思います。